

大学生の生殖組織保存に関する意識調査

【緒言】

近年、癌治療のための不妊を回避する目的として、凍結保存技術が行われている。近年の生殖医療の発展、就学率の上昇、晩婚化などにより、この技術を用いる機会も増え、それに伴い、倫理的問題も起こると考えられる。そこで、今回、生殖年齢である大学生に生殖組織の凍結保存技術に関して、どのような意識を持っているのかを調査した。

【対象・方法】

2009年4～11月、同意の得られた大学生626名に対して、生殖組織保存に関する無記名の自己記入式質問紙調査を施行した。質問紙は、回収箱を用いて回収した。

【結果】

自分自身の生殖を目的とした質問で、全体で、男性生殖組織の凍結保存を行う場合「癌患者が、治療で不妊になった場合の将来の妊娠に備えて」92.6%、「戦争へ行く兵士が化学兵器などで不妊になった場合に備えて」86.1%、「パートナーの見つからない20代、30代の男性が将来の妊娠のために」34.1%、「20代、30代に仕事に打ち込むため仕事第一の男性が将来の妊娠のために」24.0%。女性生殖組織の凍結保存を行う場合「患者が治療で、不妊になった場合の将来の妊娠に備えて」91.2%、「戦争に行く女性兵士が化学兵器などで不妊になった場合に備えて」82.1%、「不妊治療をしている女性が閉経直前の年齢になったとき」65.1%、「パートナーの見つからない20代、30代女性が将来の妊娠のために」34.6%、「20代、30代に仕事に打ち込むキャリアウーマンが妊娠のために」24.5%となった。

男女間では、特に有意差が見られたのは、男性の生殖組織凍結保存では「パートナーの見つからない20代、30代の男性が将来の妊娠のために」の肯定度は、男性41.6%、女性29.4%、また「20代、30代に仕事に打ち込むため仕事第一の男性が将来の妊娠のために」男性:30.1%、女性:20.4%と男性が女性より高率で、女性の生殖組織の凍結保存では「パートナーの見つからない20代、30代女性が将来の妊娠のために」の肯定度は、男性40.2%、女性31.5%、また、「20代、30代に仕事に打ち込むキャリアウーマンが妊娠のために」男性31.1%、女性:20.7%と男性の肯定感が女性より有意に高率であった。

小松原一恵 指導教員 中塚幹也 教授
医療系・非医療系間で、特に有意差が見られたものは、男性の生殖組織の凍結保存では「パートナーの見つからない20代、30代の男性が将来の妊娠のために」の肯定度は、医療系29.3%、非医療系38.6%、「20代、30代に仕事に打ち込むため仕事第一の男性が将来の妊娠のために」医療系17.5%、非医療系30.0%と、医療系の肯定度が、非医療系よりも有意に低率であった。女性の生殖組織保存では「パートナーの見つからない20代、30代女性が将来の妊娠のために」の肯定度は、医療系29.9%、非医療系39.0%、また、「20代、30代に仕事に打ち込むキャリアウーマンが妊娠のために」医療系20.7%、非医療系27.6%と、医療系の肯定度が、非医療系よりも有意に低率であった。

【考察】

全体では、自分自身の生殖を目的とした凍結保存技術について見ると、全体では、回避できない理由における凍結保存については、肯定感が高率であったが、自身の都合による凍結保存に関しては、肯定感が低率であった。

男女間では、男性は、仕事に打ち込むためなどの妊孕性の保存の場合、肯定感は、女性と比べ、有意に高率であった。男性の方が、妊孕性の保存のための利用に寛容であり、背景として、男性は女性より、仕事への優先度が高く、逆に、女性は、男性と比べ、仕事より妊娠、分娩を優先したいと考える人の比率が高く、仕事に打ち込むための妊孕性の保存の場合では、肯定感が低率となる傾向が見られたと考えられる。

医療系・非医療系の間では、医療系は、妊孕性の保存での生殖凍結保存の肯定感は、非医療系学生と比べて、有意に低率であった。これは、生殖組織保存のメリットだけでなく、デメリットも理解しているためと考えられる。

【結論】

今回の結果より、男女間、医療系か否かで生殖組織保存に対する認識の違いがあることが分かった。今後、更なる生殖組織の保存技術の進展、技術を用いての妊娠出産の増加が予測される。それに伴い倫理的問題も生じると考えられ、その倫理的理解を行う上で、「生殖組織保存」に対して、一般の社会人がどのような意識を持っているかを調査することは重要であり、実態を引き続き調査を行う必要がある。+

